

## 太田夢庵の書と篆刻

玉澤 友基

### 一 はじめに

盛岡市出身の太田孝太郎（明治十四年～昭和四十二年）は、号を夢庵、齋号を楓園と称した<sup>1</sup>。今年、没後五十年を迎えた。盛岡市先人記念館の顕彰対象者にも指定されている。夢庵は自ら編纂した『盛岡市史』の中で、「學術」の「東洋史学」「郷土史学」「民俗学」の三分野、「美術」の中の「書道」で業績を記載している。これ以外に銀行や新聞社等の経営にも携わり、実業家としての顔があるわけ、実に多彩な活躍ぶりである。その夢庵の書は、岩手の主要新聞「岩手日報」の題字（左図）として、一九五一年九月八日の創刊五千号以来採用されている。



夢庵七十歳の筆になる。地元では日頃よく目にしており、この書

のイメージは県民に浸透していると言つてよい。にもかかわらず、この書と太田孝太郎・夢庵の名を結び付けられる人は少ないようである。筆者は夢庵の書に興味を持ち、長年にわたり資料収集に当たり、嘗て夢庵の学問や芸術の理念について考察した<sup>2</sup>。本稿では、多様な夢庵の書と共に早年の自刻印譜『續印人傳姓氏印譜殘稿』の印影を紹介し、夢庵の書と篆刻の全体像を明らかにしたい。

### 二 夢庵の書と篆刻に関する自己評価

夢庵が、自身の書と篆刻についてどう見ていたのか見ておきたい。太田夢庵の書は諸家に参じ模倣を嫌い、その範疇以外に逸出せんとするも、篆隸以外、年を重ねるも未だ未成の中にある。

これは夢庵を知る人にとっては余りに有名な一文であり、嘗て詳しく論じたのでここでは最低限にとどめる。夢庵自身が執筆編集した『盛岡市史』<sup>3</sup>の中で述べた書に関する自己評価である。この本が刊行された昭和三十五年五月、七十九歳の時の評で、昭和四十二年一月に八十六歳で逝去する七年前の記述であるが、これが最終の自己評価と考えてもいいのかどうか。伝統を踏まえつつ、自己表現の独自性をひたすら求める姿勢は、中国書法に通底して流れる意識であり、それを熟知した夢庵ならではの言葉と言つてよい。ここでは篆書や隸書の表現に関しては自信の程を示しつつも、楷書や行草書は未完成と言うのだが、果たして如何であろうか。

また、自身の篆刻について、

太田夢庵は五世浜村蔵六を師として研修したが、眼高手低の嘆に絶えず、大正三年刀を抛ち爾来また一印を作らず、昭和三年早年作るところの印を以て、「続印人傳姓氏印譜殘稿」を作った。石井雙石より年齒少きこと八才、蔵六の同門で、昭和十八

年大日本書道報国会の結成せらるゝや、東京以北、東北・北海道を代表して本部篆刻評議員に就任した。(前掲書、二〇二頁)と述べている。「眼高手低の嘆に絶えず、大正三年刀を抛」つたと言うが、果たして「手低」であったのか。また、戦時中の東北・北海道を代表する篆刻家としての存在には触れ、篆刻への関りを記している。ここまですが記録に残された自己評価である。

### 三 夢庵の書と篆刻に関する論評

拙論以外の夢庵の書や篆刻について論評したものは僅かであるが挙げよう。

古くは岩手県師範学校の教員故白井鹿山の『鹿山遺稿』(昭和四年)に「夢庵刻印記」という一文がある。その中で、鹿山は夢庵から「鹿山」と刻した印を贈呈され、その印についての感想を述べたものである。それには、

蕭散飄逸、氣韻生動。決非尋常鐵筆家所及。

と記した。

また、夢庵は、花巻市鳥谷崎神社境内にある谷村貞治像の台座の題字も書いているが、完成した題字を見た像の作成者故舟越保武氏が夢庵の題字のスケールに驚嘆した旨の話を中野誠之助氏は語っている。この作については後述する。河北新報紙<sup>6)</sup>は、その記事の最後に「個性的な書風で人々に感銘を与えている。」と述べているが、「個性的」と評するにとどまっている。

夢庵は昭和三十一年から三十六年まで岩手大学の非常勤講師を務め、書道史を講じている。当時、大学の助手を務め、学生と共に受講した故村松大感氏は、『墨』八十六号<sup>7)</sup>の中で、終講時に頂戴した「壺中天地」の作に触れ、「夢庵の徹した生き方に基づいた、清韻の

一作」と評している。

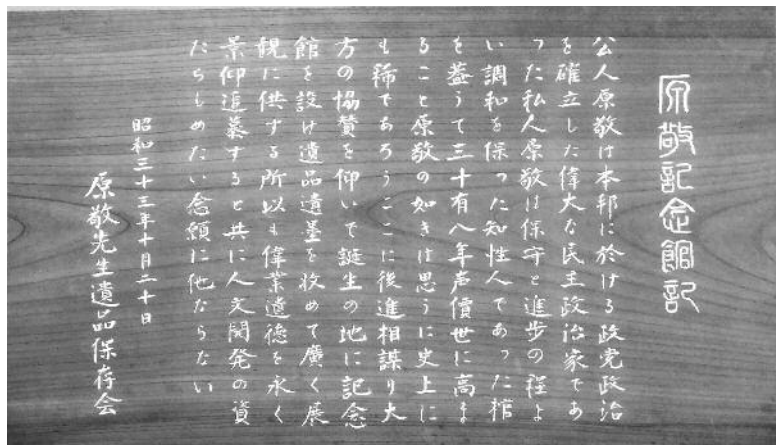
### 四 夢庵の書

ここからは、具体的に多様な夢庵の書を見ていきたい。書簡が上手く書けるようになれば作品は上手くならない、とはよく言われる言葉であるが、基礎的技術を見るために、初めに楷書、次いで行草書、最後に、夢庵が自信の程を示している篆隸の作品を見たい。

#### ① 篆書・楷書「原敬記念館記」昭和三十三年・七十七歳

盛岡市原敬記念館  
縦六八・〇 cm 横  
二六・〇 cm

題記は篆書(小篆)である。夢庵の篆書は印篆(方形の空間を隙間なく埋めるように書く)に似て、なだらかな曲線よりも方形の中を埋める造形である。



「原敬記念館記」



「七ツ森顕彰碑」部分

② 篆書・楷書「七ツ森顕彰碑」昭和二十五年・六十九歳、雲石町七ツ森

本文の書風は、中国南北朝から隋朝期の墓誌銘を想起させる扁平な外形に、筆法は本文の十一行目「開」の門構え等、明らかに蔵鋒向勢の顔法である。  
 撰文は作家の故鈴木彦次郎氏、刻者は五六堂の故鏡慎二郎氏である。ほか、「人」字は五回出て来るが自然な変化の妙を示す。言わば「諸家に参じ」た書であろう。

碑の題額は篆書（小篆）横書きで「七森顕彰碑」、本文は整齊な初唐風の楷書である。「七ツ森」払い下げ顕彰碑で、高さ約三・三m、幅一・四m。撰文は民俗学者故田中喜多美氏、刻者は故三浦源蔵氏。

③ 楷書「漢魏六朝官印考」本文 昭和四十一年・八十五歳  
 最晩年の筆跡である。刊行に当たって夢庵自身は活字化を希望したが、故西川寧氏の反対で断念し、自筆をそのまま印刷したと伝えられる。北朝の墓誌銘の書風を髣髴とさせ、楽な連筆で品格がある。

淮南王印

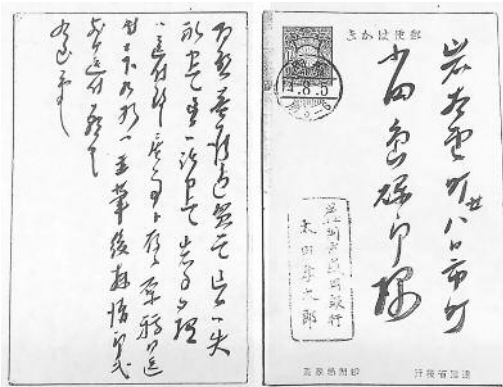
淮南郡魏置。南宋者。今均在安徽。漢書高帝紀。布都壽春。李憲為淮南子。沖亦皆有此號。宋北

『漢魏六朝官印考』部分（原寸）

④ 行草書「那珂梧樓傳」昭和二十三年・六十七歳 盛岡市先人記念館蔵（釈文）那珂梧樓生る 祖ハ藤原秀郷の後裔、秀郷六世の孫通直常強国那阿部河辺ノ郷ニ住せり。その子通資同郡の那阿郡ニ移り……  
 夢庵のペン書き原稿、日常の書である。横広の懐の広い字形を取り、筆致は流麗にして、崩し方は極めて正確である。俗に達筆という言葉は良くない意味でも使われるが、良い意味で達筆、見事の一語に尽きる。

考古学研究の仲間に宛てた葉書である。流麗見事な筆致である。候文で現代人には馴染み難い。書作品の落款もそうであるが、文字の崩し方も極限を極めている感がある。判読は難しい。

⑤ 行草書「小田島祿郎宛葉書」昭和十四年八月五日 四十五歳  
 岩手県立博物館蔵  
 積文・(表) 岩谷堂町廿八日市町／小田島祿郎様／盛岡市盛岡銀行／太田孝太郎 (裏) 拝啓益清適賀上候。過日ハ失礼申上候。過日御話申上候岩手日報御送付致し居候事と存候。原稿御送付被下候折ハ主筆後藤清郎氏宛御送付御願上候。右急御坐候。



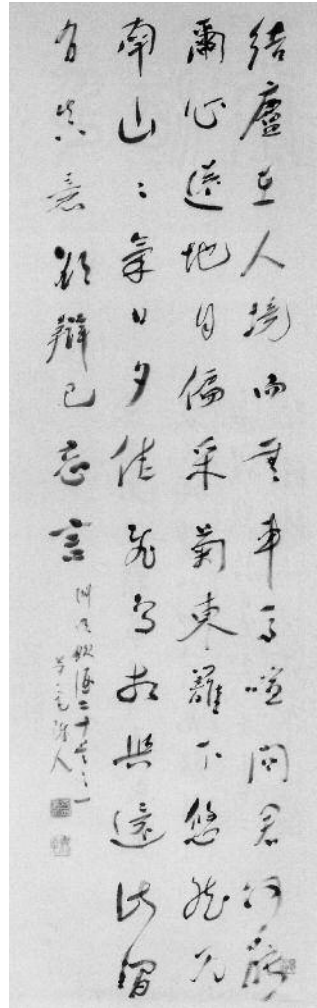
小田島祿郎宛葉書

那珂栢地生...  
 世の縁通奉...  
 [那珂栢樓傳] (原寸)

⑥ 篆書・行書「金田一國士頌」 昭和二十五年十月建立・六十九歳 花巻温泉修蔵館前 縦二一〇cm・横一五二cm  
 金田一國士の頌徳碑である。『高村光太郎山居七年』(佐藤隆房、筑摩書房)に、瀬川正雄氏談による立碑の経緯が紹介されている。題額に篆書を配し、本文は暢達した表現の行草体である。本文中の四行目「貽」字は、高村の原案では「殘」字であったが、夢庵の提案で「貽」になったと伝えられる。完成した碑文を見て、夢庵は自分のイメージと異なるものになったという趣旨のことを話したと言う。「洗」のさんずいや全体の造形に黄庭堅の影響が見られる。これと同じ文面の色紙(印刷)が残されている。文字の大きさの違いもあったか、雰囲気は大分異なる表現になっているが、書体の相違もあり、雰囲気は大分異なる。



「金田一國士頌」碑の拓本



⑦ 行草書「結廬在人境、而無車馬喧、問君何能爾、心遠地自偏、采菊東籬下、悠然見南山、山氣日夕佳、飛鳥相與還、此間有真意、欲辯已忘言、淵明飲酒二十首之一、夢庵陳人」 杉村邦彦氏主幹 『書論』第三十二号(二〇〇一年)より転載。縦一三四・〇cm × 横三三・二cm 制作年不明

単体の行草書であるが、紙面全体にも配慮が行き届き、字間ほぼ等間隔に取りながら気脈が通り、爽やかな筆のタッチ、飛動する筆の動き、暢達した筆致は素晴らしいと思う。書譜の「神融け筆暢ぶ」の作か。

〇cm × 横二四・〇cm  
 一見、単純な書き振りではあるが、語意と共に、ふくよかな線、健やかさは何とも言えないと思う。

⑧ 行草書「清風千古 夢庵」太田家蔵 小色紙 縦二一・〇cm × 横一八・〇cm

制作年は不明だが、夢庵が追求した行草書の世界の究極像、行き着いた境地を示すか。馥郁とした豊かな線質、抜け抜けとした屈託のない表情と姿は衝撃的ですからある。紙面のほぼ中央に置かれた「清」字第一画目の位置は常識で



⑩ 行草書「入門有喜 夢庵」筆者蔵 縦三四・〇cm × 横三四・五cm

現代的空间の取り方からすれば、行間が接近しているが、厳しい線質である。



⑨ 行草書「五風十雨 夢庵」色紙 中野誠之助氏蔵 縦二七・

は考えられない。しかし、前画の筆や形を受けて次々に次画が置かれ、最終的には見事に収まりを付ける。「古」の収まりなどどうにでも展開出来る世界となっているのではないか。篆隸書の表現とも異なる夢庵の世界である。

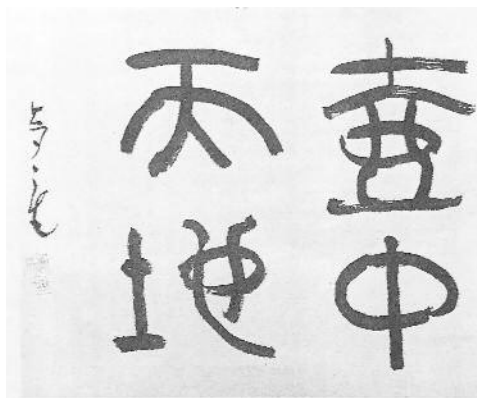
以下⑪～⑫は、『盛岡市史』で独自性を自認した篆隸書である。篆書作品の際立つ特徴として挙げられるのは、一般的に、始筆を蔵鋒に作るのを篆隸書の一つの特徴ともするが、夢庵の篆隸書は蔵鋒を殆ど意識しない筆遣いになっている。甲骨文や小篆等様々な篆書を書いている。小篆の字形は、それ程、長脚・曲線美にしない。清代の鄧石如を始めとする篆隸書の名家や、知遇を得た羅振玉等の書法も知悉していた筈の夢庵であるが、点画の接合部で緊密に点画の結合をはかることもしない。右肩部の曲線での中鋒の運筆も気に掛けない。権量銘等を意識しているのであろうか、縦長、長方形の枠の中に納まるような字形である。文字の点画は、今日の中国古代文字研究の成果で見ると正さなければならぬものも多々見かける。



⑪ 篆書「入門有喜 夢庵」太田家蔵 制作年不明

「有」は金文であるが、他は露鋒を駆使し甲骨文字の雰囲気にまともていでる。

⑫ 篆書「壺中天地 夢庵」中野誠之助氏蔵 制作年不明 縦一・〇 cm × 横二七・〇 cm



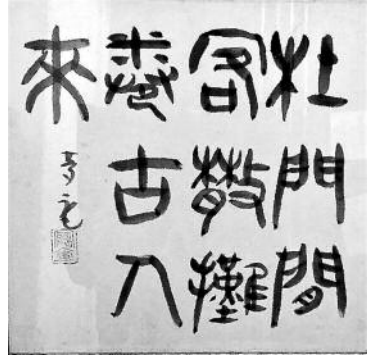
「地」字の形から小篆と判断される。小品ながら、入魂の作。

⑬ 篆書「里仁爲美、夢庵」中野誠之助氏蔵 制作年不明 縦二七・〇 cm × 横二四・〇 cm



「里」の横画を肥筆にし、金文調だが、「仁」「美」は印篆である。

⑭ 篆書「杜門閑客散、攤卷古人來、夢庵」盛岡市先人記念館蔵  
制作年不明 縦三三・三 cm × 横三四・四 cm



金文調と小篆調のミックスと言  
っていい作品。

⑮ 篆書「結廬在人境、而無車馬喧、問君何能爾、心遠地自偏、采菊東籬下、悠然見南山、山氣日夕佳、飛鳥相與還、此間有真意、欲辯已忘言、淵明飲酒二十首之一、夢庵陳人」筆者蔵 制作年不明 縦一三三・二 cm × 横三四・五 cm  
一点一画の筆のタッチに神経を配り、筆圧の強弱、線の肥瘦の變化がある。紙面全体への文字の収め方にも配意があり、落款の二行にした入れ方もよくできている。

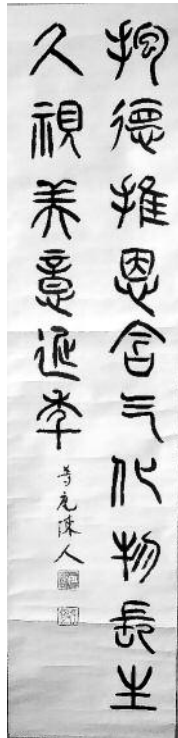


⑯ 篆書「白雲抱幽石 夢庵」筆者蔵 制作年不明 縦一二五・〇 cm × 横三四・五 cm



「白」は印篆。「雲」は雨冠を省略した説文古文。「抱」は説文或体。旁「包」は「勺」を上部に冠状にする。「幽」は金文。種々の篆書を混合していると見る。

⑰ 篆書「抱德推恩、含氣化物、長生久視、美意延年、夢庵陳人」中野誠之助氏蔵 制作年不明 縦一三七・〇 cm × 横三一・三 cm  
印篆と言うべきか。全体が明るい作品である。半切二行作品の落款位置はやや右寄りに書いているようである。一般的な書き方からすると、「徳」は旁に一画不足がある。



⑱ 隸書「岩手日報」昭和二十六年、七十歳  
冒頭で紹介した新聞の題字である（二〇九頁を参照）。一見、横平堅直で一字一波の波磔を持つ八分隸かと思いきや、藏鋒に固執せずに露鋒も混じり、典型的八分隸とは異なっている。通常は「手」字の第三画目に波磔を付けるが、二画目に持ってきている。細身の

線で、顫動を加え、中国書法の礼器碑、楊峴等を想起させる書風である。起筆は露鋒気味で悉く変化している。品格ある書と言えよう。

⑱ 隸書「原敬記念館」拓本 昭和三十三年・七十七歳

右払いの波磔・波勢を控えて書き、古隸風である。始筆は筆の逆入をそれ程深くしないで真上から鋒先を突き込んでいるようである。谷朗碑等の影響であろうか。



⑳ 隸書「勲二等 谷村貞治先生」 昭和四十一年頃。花巻市鳥谷崎神社（文字の見やすさの関係で斜めの角度から撮影した。）

境内にある故谷村貞治氏像の題字。銅像の台座左側に「昭和四十二年の春建立」と刻字してある。夢庵は昭和四十二年一月十八日に亡くなっているから、碑が完成する前に亡くなったであろう。すると実際に書かれたのはその前年昭和四十一年か。いずれにしても、最晩年の書である。上部の像の原型制作は故東京芸大教授舟越保武氏、铸造は故東京芸大教授鈴木貫爾氏。プレート部分の寸法は縦七〇・〇cm、横一一・〇cm。

「二」「等」「村」「先」等に波磔が見られるので隸書であると判断するが、「勲」の烈火や、「生」等は隸書的ではなく、随所に行草的筆遣いが見られ、雑体書とも言うべきか。「谷」「村」に見られる肥厚な点画は堂々としたスケールの醸成に一役買っている。前述したように、完成した全体の姿を見た舟越氏が驚いたという書である。



五 夢庵の篆刻

夢庵の刻した印は殆ど伝わっていない。『續印人傳姓氏印譜殘稿』の存在が自身の『盛岡市史』や『著作目録』に掲載されており、その存在を知ることが出来るが、発行部数が極めて少なかったと思われ、一般に目にすることは困難である。自身の仕事として明記しているということは、後世に伝えたい意思が存在したと思われる。目錄に掲載されていない原稿も他に存在することになった。印面の布置章法の妙、風韻ある線質は如何であろうか。刻されたのは中国に赴任する前の段階であり、この後、方若や羅振玉との交流が始まり、古銅印の収集と研究が展開するのである。

『續印人傳姓氏印譜殘稿』について

印譜原本は縦六・六cm、横四・五cm、一九頁で、通常の印譜のように見開きの左側紙面に一印ずつ捺してある。印譜の中扉には「大正三年」と印字してあり、『著作目録』の記録「昭和三十三年刊行」とは異なっている。序文から判断すると、大正三年にはこの印譜の構想があり、「牧雲子太嶺」（臨済宗の僧籍ある人物か）なる人物から序文を貰っていた、と推測することが出来るのではないか。

本稿次頁における印影は、本紀要の紙面の都合上、一ページの紙



<p>⑭</p> 	<p>⑨</p> 	<p>④</p> 	<p>續 印 人 傳              姓 氏 印 譜              殘 稿</p>
<p>⑮</p> 	<p>⑩</p> 	<p>⑤</p> 	<p>點 破 太 虛 空 歸 來              外 線 明 路 通 誰 知 三 要              題 夢 庵 居 士 續 印 人              傳 印 譜              大 正 三 年 五 月              牧 雲 子 太 翁</p>
<p>⑯</p> 	<p>⑪</p> 	<p>⑥</p> 	<p>①</p> 
<p>⑰</p> 	<p>⑫</p> 	<p>⑦</p> 	<p>②</p> 
<p>⑱</p> 	<p>⑬</p> 	<p>⑧</p> 	<p>③</p> 

『續印人傳姓氏印譜殘稿』（中野誠之助氏藏）

印影は原寸大、原本掲載順である。

面に収まるように編集した。

(釈文)

點破太虚空歸來線路通誰知三要外明月印江中 題夢庵居士續印人傳  
姓氏印譜 大正三年五月 牧雲子太嶺

太虚空なるを点破し、帰來すれば線路通ず。誰か知らんや三要の外、  
明月江中に印す。夢庵居士の續印人傳姓氏印譜に題す。大正三年五  
月、牧雲子太嶺。

- ① 南阜(高鳳翰) ② 臣高 ③ 治亭(朱宏晋) ④ 厚光(戴厚  
光) ⑤ 臣琰(朱琰) ⑥ 胡志仁印(胡志仁) ⑦ 長州 ⑧ 復夫  
(楊心源) ⑨ 芑堂(張燕昌) ⑩ 董洵印(董洵) ⑪ 張鈞私印  
(張鈞) ⑫ 黄埧(黄埧) ⑬ 張梓之印(張梓) ⑭ 鍊玉道人  
(陳鍊) ⑮ 汝爲 ⑯ 吳晋(吳晋) ⑰ 吳少甫印(吳少甫) ⑱  
啓水(淑)(王敬淑)

## 六 夢庵の学書とその根底にあるもの

夢庵の学書について、夢庵自身の記録も、伝來するものも無く、  
定かではない。個々の筆跡の考察の中で触れたように、残された筆  
跡から探らなければならぬ。幼少期の育った環境とコレクシヨンの  
存在は考慮すべきである。コレクシヨンと実際の書技の表現力  
とは一般に必ずしも直結するものではないと思うが、書道史全般に  
わたる知識と鑑賞は、それらから書的榮養を得ていたことを想像さ  
せるに十分である。

幼少期育った自宅の隣には蔵があり、その中の先祖伝來の掛軸や  
骨董はその内容を熟知していたと伝えられる。祖父は諱を久孝、通  
称は孝、字は子顯、号を鶴舟、至誠堂等と称し、藩政期、南部家の  
藩主と共に詩歌や書を楽しんだと伝えられ、盛岡市史にも紹介され

ている。また、父の小二郎も、盛岡市史では、明治四十二年に日本  
画の愛好会の結成メンバーに加わっていたことが紹介されており、  
恵まれた芸術文化の環境の中で育ったことは言えよう。

夢庵の古銅印や古印譜のコレクシヨンは有名であるが、個人博物  
館を目指していたとも伝えられ、印学関係以外にも、漢籍の文献や  
金石資料等のコレクシヨンも多く、注目しなければならぬ。単な  
るコレクターでなく、個々の資料に関して見識を持っていた。それ  
は、大学教育の場で、昭和三十一年から三十六年まで岩手大学学芸  
学部書道科の非常勤講師を務めたが、その講義から伺える。講義の  
様子について、当時、学芸学部助手で、学生と共に聴講した故村松  
大感氏は、

もの静かに語る温容が今でも脳裏に焼きついている。黒板一杯  
に古碑名蹟を丁寧に板書し、学生がノートし終えたのを確認し  
てから徐ろに消去、また板書しつづける。そのあとに持参の資  
料を自らの手で繕いて懇切に説明されるのが常で、とかく実作  
にのみ偏りがちの若い学徒に、学究的な眼を開かせてくれるの  
であった。(『墨』平成二年九・十月号、一三八―一三九頁)

と書いている。また、村松氏の詳細な受講ノートが本学の書道研究  
室に残されており、その内容を知ることが出来る。因みに昭和三十  
四年五月十五日の講義ノートには、

曹全の研秀は漢石中において稀に見るところであるが、風韻に  
おいては最高のものとするは出来ない。かくの如く二碑は  
代表作の如く見られるのであるが、先に述べた開通褒斜、三公  
山、西狭頌、子游、張遷の如きは両碑以外にあって勝をほしい  
ままにするものであり、俄かに甲乙を決すことは出来ない。

六月のノートを開くと、

正書には谷朗碑(鳳凰元年、湖南耒陽)と賣地券がある。賣地  
券は草卒に刻したものに過ぎないが、谷朗碑は古泉山館金石文

篇に文詞古雅端勁にして法あり、東京を去ること未だ遠からず。気分が後漢の氣に迫っている。尚漢人の遺意多し。當に漢碑と同じ墨林の寶藏たるべしとある。隸意饒ものである。

等と言った内容である。講義では、書跡資料名等は実に多数かつ詳細に紹介されており、平碑記等の中国書論を引用しながらの解説がなされている。当時の学生にとっては、実に難解であったと聞く。夢庵の『著作目録』「未刊本」の項目に、

中国金石学 岩手大学講義草按 八 昭和三一

宋元の書学 岩手大学講義草按 一 昭和三六

明清の書学 岩手大学講義草按 一 昭和三六

の記述が見えているが、原稿は現在所在不明である。

## 七 おわりに

夢庵の書の根底には、日常の筆記や行草書に見られるように、十分に鍛錬された確かな腕があった。揮毫に当たっては、種々の古典の表現を参酌している姿も見ることが出来る。学問研究で言えば、先行研究を踏まえて表現するその姿勢は書の専門家と言うに相応しいものである。コレクターと研究者としての識見や眼力、その上に、冒頭に紹介した高邁な自己表現に徹する独往の精神を以て夢庵の芸術は展開されたと考えることが出来る。

夢庵の書と篆刻を通観して、作品と篆刻は相通じるものを持っていると感じる。師範の白井鹿山の評「蕭散飄逸」が的を得ているように思う。一見整っていない無法とも見える世界である。それは篆隸書においては露鋒を駆使した表現となった。篆隸に止まらず行草書においても「清風千古」に見られるような無碍の表現に到着したと考えることは出来るのではないか。篆刻については、余りに早年

(三十三歳)にして実作を放擲してしまったことが惜まれる。中国古銅印の収集と研究を踏まえての刻印がなされたなら、どんな印を残したであろうか。

付記・本稿の執筆にあたっては、ご遺族の太田稔氏、夢庵の生前に親交のあった中野誠之助氏に、資料のご提供と共に多々ご教示を賜った。厚く御礼を申し上げます。また、作品図版の提供を頂いた関係機関(作品毎に表記させて頂いた)、並びに論文中にノートの引用をさせて頂いた恩師の故村松大感先生にも感謝を申し上げます。

さらに『續印人傳姓氏印譜殘稿』の釈読について協力頂いた本学平泉文化研究センター教授劉海宇氏にもこの場を借りて謝意を表したい。

## 参考文献

- ・太田夢庵『續印人傳姓氏印譜殘稿』大正三年
- ・太田夢庵『藏書目録解題』昭和三十一年
- ・太田夢庵『著作目録』昭和四十年
- ・太田夢庵『漢魏六朝官印考』昭和四十二年
- ・白井鹿山『鹿山遺稿』昭和四年
- ・『岩手日報』昭和二十六年九月八日付朝刊
- ・『盛岡市史』第十一分冊 文教編 盛岡市 昭和三十五年
- ・『河北新報』平成二年五月二十八日
- ・『墨』平成二年九・十月号、芸術新聞社
- ・『平成五年度研究紀要 第五号 日本国語教育研究』日本国語教育学会岩手支部会 平成五年
- ・『印人傳・續印人傳』江蘇廣陵古籍刻印社、平成十年
- ・『石井雙石展』篆刻美術館・古河街角美術館 平成二十年
- ・『太田夢庵藏印選・富山県篆刻研究会刻心社展三十回記念』平成二十四年

## 註

## 太田夢庵の書と篆刻

- (1) 昭和四十一年八月～四十二年一月頃作成された孝太郎自筆の年譜による。
- (2) 玉澤友基「太田夢庵の学芸と理念」『平成五年度研究紀要 第五号 国語教育研究 岩手』日本国語教育学会岩手支部会 平成五年 三八～四四頁
- (3) 『盛岡市史』第十一分冊 文教編 第三章美術 第一書道 昭和三十五年一九七頁
- (4) 年齢は夢庵が雙石より八歳歳下であるが、蔵六に師事したのは三年早かった。夢庵の眼を信じていた雙石は、自分の印影全てを夢庵に送り批評を仰いでいた。
- (5) 岩手ケーブルテレビ、ICTコミュニティチャンネル、盛岡の先人を語る「郷土史家太田孝太郎」(平成四年一月二十二日収録)の中野誠之助氏と山田勲氏の対談の中でこのことが紹介されている。
- (6) 平成二年五月二十八日付「河北新報」『いわて 人と美(二〇) 太田孝太郎』
- (7) 『墨』平成二年九・一〇月号、(株)芸術新聞社、一三八～一三九頁。
- (8) 夢庵の刻印は、平成二十年九月二十七日から十一月二十四日まで篆刻美術館・古河街角美術館で開催された「石井雙石展」に二点出品された。また、『太田夢庵蔵印選・富山県篆刻研究会刻心社展三十回記念』(平成二十四年)に小西憲一氏の研究成果が掲載されている。
- (9) 『蔵書目録解題』の自身の蔵書に関する記録には、「太田孝太郎、経類九十五部」「五百十三冊」史類七百九十九部三千八百七十七冊、子類百五十四部一千二百四十四冊、集類百九十二部千三百五十五部、叢書類五十四部二千二百十六冊、計千二百四十四部九千五百五十五冊、凡に中国刊、和刻本は百の二に過ぎず、中古銅印譜二百三部千三百三十余冊ある。」とあり、殆どが中国の出版物で占められている。

(二〇一七年四月二十四日受理)